

留学生スピーチの評価基準と評価の過程

—— 日本語母語話者と非母語話者の比較 ——

一二三 朋 子

1. はじめに

スピーチとは、相手との相互交渉を伴う対話・会話とは異なり、独話に近いものである。しかし、独話に近いとはいえ、そこに聞き手が存在しなければスピーチは成り立たない。準備した原稿を正確に暗誦するだけでは、聞き手を感動させるようなスピーチとは言えないであろう。聞き手の高い評価を得るスピーチを行なうためには、話し手は聞き手側の立場に立ってスピーチを行なうこと、即ち、自分のスピーチが聞き手にとって分かりやすいかどうかを具体的にモニターしながら、聞き手の反応に応じてスピーチの軌道修正を行うことが求められる（土岐，2001）。

また、聞き手を感動させるようなスピーチを行なうためには、聞き手の反応を観察することと同時に、自分自身のスピーチを評価するための評価基準を持つことが重要であろう。日本語学習者の発話に対する評価基準に関して、渡部（2005）は、日本語教師歴のある日本語母語話者と、日本語教師歴のない日本語母語話者を対象に調査を行ない、「コミュニケーション遂行」「理解」「言語規則」の3つの因子から構成されていることを明らかにしている。しかし、渡部の研究での評価材料は、日本語学習者と日本人との会話であり、スピーチではない。スピーチにはスピーチに特有の評価基準が必要であろう。では、スピーチに関する評価基準はどのような因子から構成されているのであろうか。

一方、日本語は、単に日本語母語話者（以下、NS）同士のため、或いは、NSと日本語非母語話者（以下、NNS）のための言語ではなく、NNS同士の場面でも使用される言語となりつつある。宇佐美（2001）は、スピーチの評価基準作成のためには、NNSの評価基準も知ることが重要であり、「日本人に分かってもらいやすい話し方」を目指すだけでは不十分であることを指摘している。スピーチの評価が、NSとNNSとでは必ずしも一致しない場合もあるであろう。また、たとえあるスピーチがNSにもNNSにも高く評価される

ときでも、総合的評価に関わる個々の評価基準は異なる場合も考えられる。個々の評価基準に対してNSとNNSとではどのように異なるのであろうか。

また、スピーチ評価の過程について森越（1999）は、日本人38名に留学生のスピーチを評価させた結果を分析し、日本人の評価が段階的に行なわれることを報告している。森越によれば、評価の第1段階は、発表者の最初の挨拶での声や表情・態度であり、そこで外面的な評価が下される。第2段階は発声面での「聞きやすさ」から内容の「理解しやすさ」へ、さらに「内容そのもの」へと、評価の対象が推移すると考えるのが妥当だとしている。つまり、スピーチの評価の観点はいろいろあるが、それらは無秩序に評価されるのではなく、段階を追って、外面的評価から内容的評価へと深化し、最終的な総合評価に結実すると仮定できる。

以上を踏まえて本稿では、スピーチを評価する評価基準の構造を明らかにすることを第1の目的とする。次に、NSとNNSとでは、どのように評価基準が異なるのかを明らかにすることを第2の目的とする。最後に、スピーチに関する個々の評価基準が、スピーチへの総合的評価に結びついていく過程を、NSとNNSとそれぞれについて明らかにすることを第3の目的とする。

2. 方法

2-1. 調査方法

留学生のスピーチコンテストで発表された12のスピーチの中から、優秀賞を取ったスピーチを選び（表1参照）、被調査者にその録画ビデオを視聴してもらう。スピーチの視聴後、そのスピーチについて、質問紙の評価項目に5段階評定（「とても強くそう思う」から「全くそう思わない」まで）で評価してもらった。

質問紙作成に当たっては、予備調査として、留学生17名に「いいスピーチ」の条件を自由記述してもらったものと、日本語学習者のスピーチ指導のための『日本語 口頭発表と討論の技術』を参考にして、28の評価項目（表2参照）と、スピーチ全体への総合的評価としての5項目「感動した」「おもしろかった」「満足した」などを設定した。

表1 スピーチの概要

発表時間	文の長さ			文の構造			語彙数	
	総文節数	文数	1文の長さ	単文	重文	複文	総数	異なり
5分45秒	354	31	11.4節/文	15	6	10	346	222

2-2. 被調査者

日本人大学生98名（男性29名，女性69名，平均年齢20.9歳），外国人留学生128名（男性53名，女性74名，不明1名，平均年齢22.8歳）。NSの出身国は，中国109名，韓国8名，その他11名（ベトナム，台湾など）であった。日本語レベルは中級後半から上級である。

2-3. 調査時期

2005年12月から2006年6月まで，筆者自身が行なった。

3. 結果と考察

3-1. 評価基準の構造

本稿の第1の目的として，スピーチを評価する評価基準の構造を明らかにするために，評価項目の評定値について因子分析を行なった。NSとNNSとを分けて行なった因子分析結果と，両者を合わせて行なった因子分析結果とを比較し，それぞれの因子構造が80%近く共通していることを確認した。そこで，両者を合わせて固有値1以上を基準にして因子分析（主因子法とバリマックス回転）を行ない，4因子解が適当と判断した（因子構造は表2参照）。

第1因子は，自信を持ち，リラックスして話している，よく暗記している，など，話すときの態度に関する項目から構成されており，「態度」因子と命名した。第2因子は，身近な問題を扱っている，平易な言葉遣いで言語的間違いが少ない，などの項目から構成されており「テーマ・言語」因子と命名した。第3因子は，自分の気持ちや考えをうまく表現している，個性的である，内容が深い，など，スピーチの内容に関する項目から構成されており，「内容」因子と命名した。第4因子は発音に関する項目から構成されており「発音」因子と命名した。以上の4因子は，スピーチを評価するために設定された28の評価項目を4つの評価基準に要約したものといえる。

表2 因子構造 (質問項目)

	因 子			
	態 度 ($\alpha = .84$)	テ ー マ ・ 言 語 ($\alpha = .78$)	内 容 ($\alpha = .78$)	発 音 ($\alpha = .84$)
q16 自信を持って話している	.661	-.110	.410	.142
q06 多様な表現やことば	.606	.080	.162	.123
q24 リラックスしている	.539	.072	.134	.278
q05 落ち着いている	.531	.222	.102	.201
q19 よく暗記している	.526	.196	.022	.008
q23 感情をこめて話している	.520	.119	.356	.135
q07 姿勢がいい	.495	.075	.294	.095
q22 きちんとした服装	.472	.288	.056	.070
q02 大きく元気な声	.437	.029	.434	.092
q12 皆を見ながら話す	.358	.271	.152	.006
q14 話すスピードが適切	.352	.230	.204	.152
q04 礼儀正しい	.251	.203	.151	.166
q25 身近な問題を扱っている	.215	.654	.152	.018
q27 言いたいことがよくわかる	.092	.642	.305	.187
q26 理解しやすく平易な言葉遣い	.045	.577	.133	.297
q10 文法の間違いが少ない	.418	.504	-.077	.174
q21 ことばや表現の間違いが少ない	.378	.444	-.069	.358
q01 自分の経験・具体例	.289	.374	.276	-.027
q15 自分の気持ちをうまく表現している	.364	.202	.592	.178
q03 個性的	.202	.055	.584	.219
q13 自分の考えが入っている	.257	.311	.533	-.080
q17 内容が深い	.063	.331	.514	.053
q08 説得力がある	.070	.475	.480	.228
q09 ジェスチャーがありわかりやすい	.033	.021	.352	.337
q18 聞いている人に話しかけるような話し方	.251	.086	.328	.239
q28 日本語らしい発音	.095	.166	.164	.819
q20 発音がいい	.232	.109	.109	.798
q11 はっきりした発音	.226	.217	.138	.551

3-2. NSとNNSとの評価基準の違い

本稿の第2の目的であるNSとNNSの評価基準の違いを検討する。分析の手順として、まず、上で明らかになった4つの評価基準及び5項目からなる総合評価（「感動した」「おもしろかった」「満足した」「勉強になった」「他の人にも聞かせたい」）を尺度（「態度」尺度、「テーマ・言語」尺度、「内容」尺度、「発音」尺度、「総合評価」尺度）として、その尺度得点を算出する。尺度得点とは、その尺度を構成する各項目の評定値の平均値である。例えば「態度」尺度を構成するのは12項目あるので、各項目の評定値を足していき、その合計値を項目数12で割ると、「態度」尺度の得点が算出される。得点の範囲は1～5で、得点が高いほど、それぞれの評価が高いことを表わす。尚、尺度としての信頼性を示す α 係数（表2参照）はいずれも.75以上であり十分信頼できるといえる。次に、算出された尺度得点を対象にt検定を行なう（表3参照）。

表3 尺度得点の基本統計量（平均値・標準偏差）とt検定結果

	態 度	テ-マ・言語	内 容	発 音	総合評価
NS (n=98)	4.09(.46)	3.97(.57)	3.34(.58)	2.91(.78)	3.13(.78)
NNS (n=128)	3.57(.48)	3.80(.53)	3.20(.54)	2.81(.85)	2.88(.75)
t 値	8.22***	2.23*	1.93†	.92	2.43*

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

() 内の数値は標準偏差

その結果、「態度」「テーマ・言語」「内容」「総合評価」のいずれにおいても、NSのほうがNNSよりも評定値が高いことが示された。NSのほうがNNSよりも、外国人の日本語によるスピーチについて肯定的に評定することがわかる。「発音」についてはNSとNNSとに有意差が見られなかった。NNSの感じる聞き取りにくさ・聞き取りやすさは、NSの感じるものとほぼ同じであることがわかる。NNSに関してはさらに日本語能力レベルで上級・中級に分けてt検定を行なってみたが、やはり有意差は見出せなかった。発音のよしあしについては、日本語能力によらず共通した評価が下されるといえよう。

3-3. 個々の評価基準と総合評価との因果関係

本稿の第3の目的として、以上の4つの評価基準が段階的に推移し、スピー

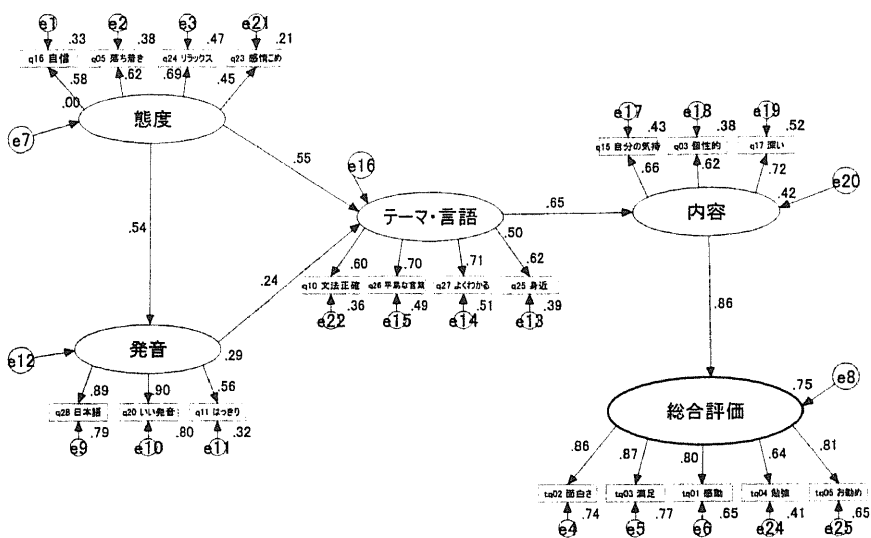


図1 NSの評価過程のパス図

チの総合評価に結びついていく過程を検討していく。森越（1999）の考察に従って、4つの評価基準と総合評価の因果関係をモデルに表わすと、「態度」⇒「発音」⇒「内容」⇒「総合評価」となるが、本研究では「テーマ・言語」という評価基準も抽出されたので、それを組み込み、「態度」⇒「発音」⇒「テーマ・言語」⇒「内容」⇒「総合評価」というモデルを仮定する。このモデルに基づいて共分散構造分析を行ない、各評価基準間のパスを削除したり追加したりしながら、最も当てはまりの良い結果を図示したものが図1・図2である。

パス解析の結果から、森越のいうように、スピーチの評価は段階的に推移するという仮定が妥当であること、NSもNNSも評価基準の因果関係の基本的構造は共通であることが検証された。評価の段階的推移については、まず、発表者の表情・声の大きさや姿勢・服装などの態度から最初の評価が始まる。そこで形成される第1印象がよいと、次に、発表者の発音に関心が向けられる。発音の明瞭さや日本語らしい発音であれば、聞き手はスピーチのテーマや言葉遣いを評価する。もし発音が不明瞭であると、聞き手は音声を聴き取ることに神経を集中し、スピーチのテーマや言語的正確さへの評価に移れないであろう。

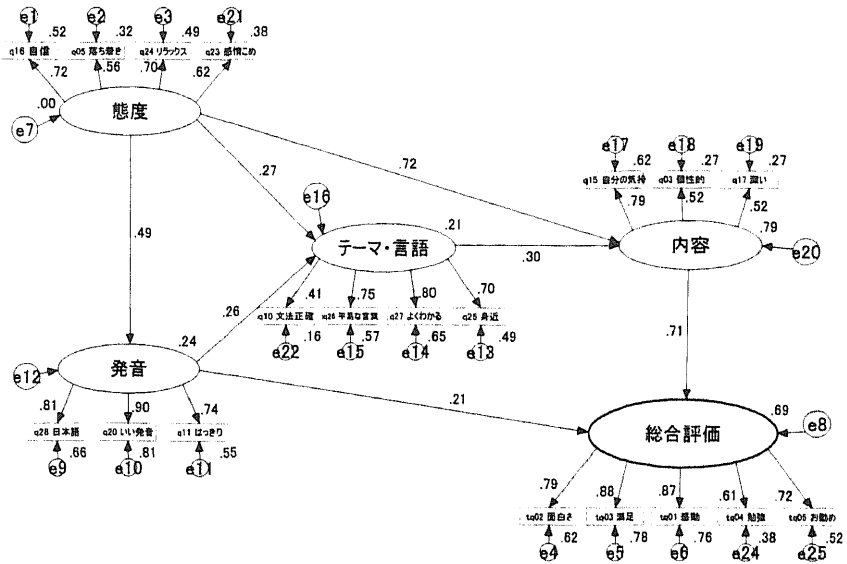


図2 NNSの評価過程のパス図

そしてスピーチのテーマや言葉遣いに間違いがないと評価されれば、スピーチの内容の評価に移行することが出来る。テーマが発表者の経験などに基かない抽象的なものであったり、文法などの言語面の間違いが多ければ、内容そのものへの評価に入ることが出来ない。こうしたいくつかの評価基準を段階的にクリアして初めて、内容に関する評価が行なわれることが推察される。発表内容に自分の独自の意見が入っているか、聞き手にも人生や社会の問題について深く考えさせるような内容が含まれているか、説得力があるか、などの評価の段階になるのである。こうした段階を経て、スピーチは総合的な評価の段階に入る。面白かったか、感動したか、満足したか、という段階である。

以上は評価の段階的推移に関するNSとNNSとの共通点であったが、両者には相違点も見出された。それは、総合評価に影響を与える評価基準である。NSの場合、総合評価に直接的に影響を与えるのは「内容」のみであるのに対し、NNSは「内容」の他に「発音」も影響を与えている。また、「内容」の評価には「態度」もまた強い影響を与えていた。NSもスピーチの評価に際し「態度」や「発音」も考慮しないわけではないが、それは評価の過程で段階的に処理されるものであり、そうした評価基準がクリアされていれば、最終的に

は純粹に内容にしぼってスピーチを玩味し評価するが、NNSにとってスピーチへの総合評価には話すときの態度や発音などのような話すときの技術的要素が重要であることがわかる。

4. 全体的考察と今後の課題

今回の調査で明らかになったことをまとめる。

- ① スピーチの評価基準の構造は、NSもNNSもほぼ共通しており、「安心感を与える話し方」「発音のよさ」「理解しやすい内容」「話すときの態度」の4つから構成されている。
- ② スピーチの評価基準については、NNSよりもNSのほうが、非母語話者のスピーチに対して肯定的（高め）に評価する。
- ③ 発音の評価に関しては、NSもNNSも有意差はない。
- ④ スピーチの評価は、発表者の話す態度の評価から始まり、次に、聞き取りやすい発音か、身近なテーマを扱っているか、正確な言葉遣いか、独自の意見などが入っているか、というように、外面的評価から内面的評価へと段階的に推移する。
- ⑤ 総合的に評価する際、NNSは外面的評価も重視する。

これらのことから、日本語学習者のスピーチ指導には、外面的評価と内面的評価の2側面があることを学習者に意識させることが必要であろう。話すときの態度や発音などについては、自分たちがスピーチをしているときの様子を録画したものなどを使い、自己モニターを働かせる指導が考えられる。また内面的評価の重要性についても強調することが大切である。筆者はある留学生から、「スピーチは日本語のうまさを評価するものなのだから、内容はどうでもいいのではないか」と聞かれたことがある。またスピーチの準備において、彼らの多くが文法的な間違いなどには神経を使うが、論旨の展開などにはあまり注意を払わない傾向があることが気になっていた。中にはインターネットなどで寄せ集めた情報を丸暗記しただけのようなスピーチも見られる。説得力のあるスピーチ、人を感動させるスピーチにはどんな内容が含まれているのかを、自分たちに考えさせていくような日ごろからのトレーニングも重要である。

最後に、今回の反省点について簡単に触れる。宇佐美（2001）はスピーチの評価基準作成について次のような提案をしている。

- (1) 日本語母語話者・非母語話者による大量の日本語発話資料を収集・録音

する。

- (2) 収集した発話資料を、音声・語彙・文法・内容等さまざまな角度から分析する。
- (3) 録音された発話資料をできるだけ多くの人に聞かせてその評価をしてもらう。
- (4) 評価と分析とを照らし合わせることによって、どういう条件が満たされたときに「いいスピーチ」と感じられるのか、その評価基準を探る。

今後は日本語母語話者・非母語話者による多様なスピーチを元にしたデータ収集が必要であろう。評価者の属性についても、今回は日本人大学生及び留学生（アジア系）に限定されたが、多様な国籍・職業・年齢などからデータを集めることも必要であろう。また、言語的分析結果と評価基準との因果関係を検証することも重要である。その上で、NS、NNSともに高い評価をするスピーチのための指導方法を具体化し、その効果を検証していくことを今後の課題としたい。

参考文献

- 倉八順子（1996）「スピーチ指導におけるフィードバックが情意面に及ぼす効果」『日本語教育』89号，39-51.
- Krashen, S. D. & Terrell, T. D. (1983) *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. Oxford : Pergamon.
- 森越一世（1999）「短期留学生日本語教育に関する一考察(3)——留学生のスピーチに対する日本人の評価——」『北海道東海大学教育開発研究センター所報』12号，27-38.
- 岡部悦子（2002）「口頭発表場面におけるスピーチ不安について」『講座日本語教育』38号，125-148.
- Oxford, R. (1990) *Language Learning Strategies : What every teacher should know*. Newberry House: NY.
- 田中真理・坪根由香里・初鹿野阿れ（1998）「第二言語としての日本語における作文評価基準——日本語教師と一般日本人の比較——」『日本語教育』96号，1-12.
- 田中真理・初鹿野阿れ・坪根由香里（1998）「第二言語としての日本語における作文評価——「いい」作文の決定要因——」『日本語教育』99号，60-71.
- 樽田ミエ子（2000）「実践報告 中上級学習者のための聞き手を意識したスピーチ指導の試み——即席スピーチと評価スピーチ——」『東海大学紀要 留学生教育センター』20号，45-55.
- 東海大学留学生教育センター口頭発表教材研究会『日本語 口頭発表と討論の技術

—— コミュニケーション・スピーチ・ディベートのために —— 』1995, 東海大学出版会

土岐哲 (2001) 「日本語のスピーチ教育」『日本語学』20巻, 6-10.

宇佐美洋 (2001) 「これからのスピーチ研究 —— 日本語教育の立場から —— 」『日本語学』20巻, 37-47.

渡部倫子 (2005) 「日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の評価 —— 共分散構造分析による評価基準の解明 —— 」『日本語教育』125号, 67-75.